

ぶらり鎌倉

光則寺のアジサイ、海蔵寺のハギ、東慶寺のロウバイ……。仕事でストレスがたまると、鎌倉に出かけます。湘南の海が近いためか、東京よりも空が青く、山との対比が鮮やか。お気に入りの寺を巡れば、季節の移ろいを感じることもできます。

江ノ電に乗って車窓から海を眺めるもよし、鎌倉山や源氏山といった見晴らしのいいところに登るのもよし。小町通りでおしるこを飲んだり、地元の野菜を使ったフランス料理を食べたりするのも楽しいです。

旅や街歩きが大好き。遠出をしたのですが、何かあったら、休日でもすぐに取材に出かけなければならぬ仕事柄、鎌倉は比較的にすぐに戻れる場所だということもあります。学生時代も失恋や将来のことで悩むと、よく出かけました。友人からは、「また、ひとり鎌倉?」と言われたものです。当時から「趣味が年寄りのようだね」と言われていた私にとって、鎌倉は、ドイツニーランドに匹敵する一大アミューズメントパークでした。

よく出かける寺の一つに、二階堂の瑞泉寺があります。JR鎌倉駅からバスに乗って、終点の大塔宮から歩いて10分。時代を感じさせる不ぞろいの石段や夢想疎石の庭園が有名な寺です。

構内のお堂に「どこもく地蔵」が鎮座しています。

昔、この地蔵堂の堂守が、参拝客もいない貧しい生活から抜け出して、他国に移り住もうと考えていました。すると、ある晩、夢枕に地蔵が現れ、「どこもく、どこもく」と言って去っていったそうです。

朝になって、僧から話を聞けば、「どこもくとは、『どこも苦』。今の境遇がつらいと言って逃げ出しても、苦勞はどこまでも付いてくるという意味でしょう」とのこと。その後、堂守は改心して、以前にも増して、地蔵堂を守り続けたという由来があるそうです。

取材の過程で、にっちもさっちもいかなくなることも多いだけに、どこもく地蔵を参拝すると、気持ちが引き締まります。普段とは違う町を歩く観光には、こういった効果もあるのではないのでしょうか。

国土交通省では、観光業の振興を成長戦略の一つに掲げています。将来の訪日外国人数を3000万人に増やそうと、観光ビザの要件緩和や、外国語に対応できるボランティアの充実、良質な旅行プランの提供といったおもてなし態勢の整備を進めています。

一方で、観光業を振興させるためには、日本人が旅を楽しむという文化をいかに育ませ

るかということも大きな課題です。さまざま

な場面で、議論を呼んでいますが、地域ごとに取得でき

る休日をずらす休暇の分散化も一つの考

えであるかと思いません。けれど、もっと

大きな問題は、旅行を楽しむ若者が減っていることでしょう。

観光庁の統計によると、20歳代の男性が国内の宿泊旅行を

する回数は年間1・16回で、男性平均の1・44回を大幅に下回り、男性の世代別では最も少なくなっています。

原因は「幼い頃に、家族で旅行を楽しんだことがない若者が増えていることに加え、今の学生は自由に使えるお金と時間の余裕がない」から。さらに、将来への不安からか、

旅行に「留学や語学研修」、「知識や教養を高める」といった「御利益」を期待している人も増えているのだそうです。

目的を持って旅をするのも大事かもしれませんが、ふらっと出かける旅の楽しさを感じ



る機会も減っているのかもしれませんが。

先日まで、タモリが古地図を片手に、都内を歩く番組が放送されていました。溜池には江戸時代まで本当に大きな池があったとか、御茶ノ水の線路脇にある神田川は、洪水を防ぐために人工で流れを変えた部分なんだとか。興味深く見ていました。旅を楽しむきっかけは、ふとしたところに見つかるような気がします。